

## 博 士 論 文 要 旨

題 目 外来で放射線療法を受けるがん患者への精神心理的援助  
－PIL テストを手がかりとした対話による看護介入の効果－  
Mental and Spiritual Care for Patients with Cancer Receiving Outpatient Radiation Therapy  
－The Effect of Communication-based Nursing Interventions Using the Purpose-in-Life Test as the  
Clue－

指導教授 牧 野 智 恵 教授

入学年月 平成 22 年 4 月 入学

学籍番号 1007601

氏 名 岩 城 直 子

### 要 旨

#### I. 序章

放射線療法は、治療装置の進歩により治療成績が向上しており、さらに身体侵襲の少ない治療である事から、外来で治療を受けるがん患者が増加している。そのような中、放射線療法中のがん患者の精神心理的苦痛が問題とされており、その苦痛を抱えながら治療を受けることは QOL の低下を招くことが懸念されている。今後、外来で放射線療法を受けるがん患者を全人的に支援していくためには、精神心理的苦痛に対するケアの構築が必要である。しかし、外来で放射線療法を受けるがん患者に対する精神心理的苦痛に対するケアの効果を検討した研究は少ない。

#### II. 研究目的と概念枠組み

概念枠組みは、Mishel の病気の不確かさ認知モデル(再概念化)をもとに、患者と研究者が対話する機会を持つことで、精神心理的援助につながるのではないかと考えた。研究目的は、Purpose in Life test 日本版 (以下、PIL テスト) を手がかりとした対話による看護介入に伴う効果 (研究 1) と、研究 1 の患者情報を放射線治療部門医療関係者との共有による効果 (研究 2) によって、外来放射線療法におけるがん患者への精神心理的援助のあり方を検討する。

#### III. 外来で放射線療法を受けるがん患者への PIL テストを手がかりとした対話による看護介入の効果 (研究 1)

外来で放射線療法を受けるがん患者を対照群 (20 名)、介入群 (19 名) に無作為に振り分け、研究対象者とした。

介入群には放射線療法開始時に PIL テストを実施し、その結果を手がかりに研究者と患者で対話し、その効果を 3 時点 (放射線療法開始時、終了時、終了 3 ヶ月後) で、Quality of Life Radiation Therapy Instrument 日本語版 (以下 QOL-RTI)、Mental Adjustment to Cancer 日本語版 (以下、MAC) の質問紙で評価した。介入の有無(対応なし)と、放射線療法開始時・終了時・終了 3 ヶ月後の時期 (対応あり) の 2 要因分散分析 (混合計画) を行なった。その結果、全対象者では、MAC の下位概念である Helpless/Hopeless (絶望感) の交互作用に有意傾向が認められ ( $p<.10$ )、介入群は、放射線療法開始時から経過に伴って絶望感が減少していく傾向がみられた。QOL-RTI には有意な交互作用は認めな

かった。今回の対象者で 60%を占めていた乳がん患者をみると、QOL の総得点と QOL 心理/精神得点において、交互作用に有意差が認められ ( $p<.05$ )、介入群において、放射線療法開始時から時期の経過に伴って、QOL と QOL の精神心理面の改善がみられていた。また、放射線療法終了 3 ヶ月後に介入群へインタビューを行い、逐語録から、看護介入に対する評価を抽出した。その結果、今回の介入について患者は、【自己洞察の機会】【病気の自覚】【語ることで楽になる】【目標を意識する機会】【質問内容の意外性】と述べていた。PIL テストを手がかりとした対話による看護介入は、がん腫に関わらず、絶望感が軽減する可能性が示唆された。また、本介入が、乳がん患者にとっては、QOL と QOL の精神的側面の改善に有効であることが示唆された。さらに、看護介入の評価として、【自己洞察の機会】【病気の自覚】【目標を意識する機会】は生きる意味や病気の意味を見出す支援になっていたことが推察された。

#### IV. PIL テストを手がかりとした患者の全体像の情報共有が放射線治療部門医療関係者にもたらす効果 (研究 2)

放射線治療部門の医療関係者合同カンファレンス (16 回) に参加し、PIL テスト後の対話によって得られた患者の全体像を情報共有し、その効果を検討した。全介入終了後、放射線治療部門医療関係者 (医師 2 名、診療放射線技師 5 名、看護師 1 名) にグループインタビューを行い、逐語録を基に質的に検討した。その結果、カンファレンス参加者から【患者理解の促進】【患者対応への利益】【いつもの態度で接する】【テスト結果に無関心】【患者への否定的効果を心配】【患者対応への戸惑い】の意見がみられた。放射線治療部門の医療関係者は、患者の全体像を情報共有したことに対し、患者理解の促進や患者への利益を評価する一方で、診療放射線技師には患者対応への戸惑いがみられていた。放射線治療部門において、患者への全人的支援を行なっていく上で、看護師が精神心理的援助を担い、それを多職種と情報共有していくというチーム医療の重要性が示唆された。

#### V. 終章

外来で放射線療法を受ける患者と研究者が、人生観や病気苦悩観、死生観について対話するという相互作用の機会を持ったことで、絶望感軽減に影響を与え、乳がん患者には QOL と QOL の精神心理面の改善効果が推察された。また、放射線治療部門において、精神心理的援助を看護師が担い、それを多職種と情報共有していくというそれぞれの専門性を発揮したチームアプローチの方法が示唆された。今後の課題として、症例数を増やし、有効性について更なる検討が必要である。今回の看護介入は、直接的に生きがい、人生の意味、死生観、病気苦悩観について問うため、そのような事柄について、経験や教育、訓練をして看護師が聞く準備をする必要があると考える。